

武家屋敷 寺島蔵人邸

令和四年 「如月・弥生の名品展」

期間 令和4年2月2日(水)～3月28日(月)

1 「内裏雛」 (だいらびな)

寺島家伝来の雛人形で、江戸時代中後期の作品。

男雛は、冠を被り、笏(しゃく)を持ち、太刀を指し、銀糸と多彩な色糸で織った華やかな束帯を着ている。

女雛は、天冠(てんかん)を被り、桧扇(ひおうぎ)を持ち、多彩な織柄や刺繍で装飾された五衣唐衣裳(いつつぎぬからぎぬも：十二単)を着ている。

2 「要文」 伝 日興筆 (ようもん にっこう)

日興は、鎌倉時代後期の僧で、日蓮の本弟子6人のうちの一人。

日蓮の死後、身延山久遠寺を離れ、現在の富士宮市に大石寺を開山した。「大師」とは、中国の天台宗祖・智顛(ちぎ)のこと。日興の師である日蓮が、智顛の著「法華文句(ほっけもんぐ)」の一節を抜粋して解釈したものを日興が書き留めたものと思われる。

「又迹は則ち本有り、本の開示悟入に従うが故に迹中の開示悟入に有るなり。今迹を開すれば即ち本を顕す。本迹二無く別無し。」

3 「山水図」 寺島応養筆 (さんすいず てらしまおうよう)

署名を記さず、「静斎」朱文方印、「応養」白文方印が捺されている。

寺島蔵人は、50歳代以後から晩年にかけて、静斎、応養の画号を用いており、蔵人独自の完成された画風を示す力作である。

4 「凍溪欲雪図」 津田菜窠筆 (とうけいよくせつず つださいか)

溪谷の水が冷え、やがて降雪を迎えようとする季節を描いた山水図。

津田菜窠(1742～1813年)は、江戸時代中期から後期にかけての医師。

寺島蔵人は津田菜窠と交流があり、蔵人が能登島に流刑にあった際、菜窠の子である随分斎から贈られた羊羹を食べたことが「島もの語り」に記されている。

5 「老松図」 東方芝山筆 (ろうしょうず ひがしかたしぎん)

東方芝山(1813～1879)は、加賀藩の支藩である大聖寺藩の藩士であり、進取の気性と卓見に恵まれ大聖寺藩の藩政改革に敏腕を振るった。明治3年3月藩庁改革の際に免職され、柴山村に隠棲した。

款記に「・・余老懶日加不能揮筆・・」とあり、老懶(ろうらん)にして日を加えるごとに筆を揮うこと能わずということから、晩年の作品である。

6 「墨梅図」 玉潏筆 (ぼくばいず きょくりん)

玉潏(1751～1814)は、江戸中期から後期にかけての浄土宗の僧。近江の出身で落款に「淡海玉潏」と記する。京都東山永観堂の住持となった玉翁の法弟。

玉潏は、詩文、書画に長じた玉翁から絵を学んだ。

【茶室で2月に展示】

6 「海棠燕子図」 鄭培筆 (かいどうえんしず ていばい)

鄭培は、中国清代中期の画家で、字は山如、号は古亭。浙江省苕溪の出身。同郷の画家・沈南蘋(しんなんぴん)に学び、花鳥画をよくする。南蘋は、享保16年(1731)に長崎に来航、同18年まで滞在し、日本の花鳥画に影響を与えた。このとき鄭培も南蘋とともに来日している。

海棠(カイドウ)はバラ科の落葉樹で、春に淡紅色の花を咲かせる。

【茶室で3月に展示】